

佳作

三年間の感謝と感動

静岡県掛川市立西中学校三年 石山 瑞葵

「えーっと、名前はーみずきちちゃん。みーちゃん初めまして。」

小学六年生の私にみーちゃん？今時そんな呼び方する人なんていない。なんかこの距離感、引いちゃう。初対面の先生の印象は、あまりいいものではなかった。

今まで診てくれた病院で、私の病気レベルが対応範囲を越えたとのことで、紹介された病院に初めて行った日のことだった。今思えば緊張で強張っていたであろう私の顔を見て、先生は敢えて「みーちゃん」と呼びかけたのかもしれない。初めは引いていた私だったが、話しやすく、しっかり聞き理解もしてくれ、説明もきちんとわかりやすく、患者の味方な先生を好きになっていった。

治療しながら様子を見ていたが、最終的に手術す

ることになった。執刀医はもちろん先生。治療時に先生といろいろ話して、先生の人柄、知識と熟練度の深さを知り、もし手術することになったら絶対この先生がいいと思っていたので、嬉しかった。

いよいよ手術・前日の夜、病院のベッドで不安になっていたと見透かしたかのようにふらっと先生が病室に入ってきて、

「どう？みーちゃん緊張してる？眠れそう？」と話かけてくれた。

「別に。」

強がって私は答えたけど、たぶん先生わかってくれていたんだと思う。忙しいはずなのに、しばらく話をしてくれて少し安心できた。手術は八時間近くかかった。私は麻酔で眠っていたが、術後、成功したことと手術の説明を受けた両親は、先生の目の真っ赤さかげんに驚いたという。ほぼ全ての手術を先生メインで行ったそうで、集中力のすごさに圧倒され感動し本当にありがたかったと言っていた。

先生は術後、毎日病室に来てはげましてくれたり、痛みが軽くなるよう手をつくしてくれた。後で、手術に立ち会った別の医師が、本当なら九時間以上かかる手術だったことと、先生の手際の良さが素晴ら

しくて、感動したと話した。先生にそれを伝えると、

「今までスピードを求めたことはないよ。自分のモ

ットーは丁寧な手術。患者さんの術後生活に支障をきたさないよう最善の注意を払って一つ一つの動作を確実にこなしているんだ。まあ、患者さんの体力・負担を思えば短時間で終わるに越したことはないけど、丁寧なことが一番大事。」

こんな純粹な思いで私も手術してもらったんだ。今私は退院して通常の生活を送っている。しばらく体育ができなかったり、動作に制限があったり、痛かったり不便なことはあるが、先生のおかげで不安なことは一切なく無事に過ごせている。私の身体にある一本の直線。たぶん大人になっても消えることはないであろうこの傷跡のことを、私は恥ずかしいと思ったことは一度もなく、むしろ誇らしいと思っている。先生とは、定期的な通院でこれからも診てもらおうが、初めて会った時からの感謝と感動を先生に伝え切れないままお世話になるのだと思う。